

## 2009 年度 DAA 交流会にみる DAA と「いきいき高齢者づくり」

「活力ある高齢社会」実現の一助とするため、当ダイヤ財団の支援のもと 1999 年に発足した「ダイヤ・アクティブ・エイジング (DAA)」(注1) は、賛助会員会社である三菱グループ企業の退職高齢者が主体的に運営している 8 つの活動グループからなり、日ごろから自主的な親睦・交流活動、社会参加・社会貢献活動を続けています。2010 年 2 月末の会員数は 278 人、平均年齢 73 歳 (59 歳～92 歳)、男性 94%・女性 6%、会員の出身会社は三菱グループ 23 社にわたります。



去る 2010 年 2 月 10 日文京区民センターで第 11 回 DAA 交流会が開催されました。交流会は、第 1 部「DAA 発足 10 周年記念行事」と第 2 部「会員スピーチ発表会」からなり、それに続く記念パーティーとも会員主体の運営により執り行われました。

DAA 交流会は DAA 発足以来ほぼ毎年開催され、普段は地域ごとに活動している会員が相互交流を行う貴重な場となっています。企画・運営は、運営委員会 (8 つの活動グループの代表が構成員) が中核となって当たっています。今回も、会の構成に始まりテーマ・発表者などの選定、パーティー会場の手配・打合せ等々、DAA 会員の協力を得ながら企画し開催されました。交流会でのスケジュールどおりの司会進行ぶり、会場設営や片付けの手際の良さなど、周到な準備のもと円滑に執り行う様子からは、彼らが現役時代に培った組織人としての協調性の高さがよく発揮されているのではないかと感じさせられました。



当財団は、DAA を「いきいき高齢者づくり」のモ

デルと位置づけ調査研究を行っています。本号では、この 10 周年記念行事を兼ねた DAA 交流会のあらましを報告し、DAA と「いきいき高齢者づくり」の一端を紹介いたします。

(注1) 2008 年ダイヤ・アクティブエイジング・アソシエーション (DAA) と改称。

### DAA 発足 10 周年記念行事

第 1 部の 10 周年記念行事では、まず現 DAA 運営委員長の近藤達男氏から今回の交流会の開催趣旨が、現財団常務理事の小松康典から財団の事業活動の近況が述べられました。続いて、DAA 発足に尽力された初代 DAA 運営委員長の巖隆吉氏と初代財団常務理事の若林健市氏から祝辞が述べられました。

以下、祝辞の中で述べられた「DAA 発足の経緯」「DAA 発足当時の課題」及び「今後の DAA 発展に期待すること」について、紹介いたします。

#### ● DAA 発足の経緯：財団設立から高齢社会リサーチモニター制度を経て DAA 発足まで

国際高齢者年の 1999 年、当財団は、それまで財団の高齢社会の諸問題に関する調査研究に寄与してきた「高齢社会リサーチモニター制度」を発展的に解消し、「ダイヤ・アクティブ・エイジング (DAA)」の発足を支援しました。

「高齢社会リサーチモニター制度」とは、財団設立の翌年 1994 年 6 月に当時の若林常務理事のもとに発足した制度で、三菱グループ各社の社員と OB から集められたモニターが、住み慣れた地域での活

動実態や日々の生活上の問題点などの情報を財団に報告していました。財団は、このモニター報告やアンケート調査を通して高齢者の声を聞くことができ、また、そこから多くの有用な知見を得て研究計画や参考資料として活用していました。一方、この制度はモニター自身に高齢社会の諸問題に関する理解を深めて頂き、それぞれ地域で活動して頂きたいという啓発的な面も持ち合わせていました。このように一定の成果を得たモニター制度ですが、次の展開を考える上で、財団は「高齢者の生きがい」に着目し、モニターを中心に、それぞれ住み慣れた地域での活動拠点となるコミュニティーづくりを始めました。

これがダイヤ・アクティブ・エイジング (DAA) の活動へと発展したのですが、このようにして財団はDAA発足を支援し、また事務局として運営面でも支援することにより、企業退職高齢者の住み慣れた地域でのコミュニティーづくり、その活動・運営方法などのモデルづくりを社会一般に提示することを目指しました。

### ● DAA 発足当時の課題

1999年5月DAA発足の運営会議が開催され、DAA会員からなる8人の運営委員で協議した結果、「地域ごとのグループ化を図り自立して社会参加活動を目指そう」ということになりました。同年7月第1回DAA交流会を開催し、参加した99人の会員が居住する地区グループ別に集まり、DAAとして目指したい方向について熱心に討議しました。その結果、既に活動を始めていた3グループに加え2つの活動グループが発足し、DAAの活動グループは5グループになりました。

発足当初DAA運営委員会の課題は活動グループの立ち上げ・支援やDAA会則作成などいくつかありましたが、最大の課題は「会員を増やすこと」でした。運営委員と事務局の財団職員が賛助会員各社やOB会に出かけ新入会員の獲得に努めた結果、会員も漸次増加し、2001年3月には会員数が171人に増え、活動グループも7グループとなり、それぞれ



DAA 交流会会場風景。

自主的に活動を行うようになりました。

その後DAAは、発足3年目、8年目の2回にわたる変革期を、DAA運営委員会での「DAAのあり方」についての熱心な議論を通し、乗り越えてきました。1回目の変革期では社会参加活動・社会推進活動を推進しようという機運が高まり、各グループの多様な活動が展開されました。また、2回目の変革期では、現状の問題点の整理と見直しを図り「DAA会則」「DAA運営細則」が定められ(2008年4月)、以後これに沿った活動をしながら現在に至っています。

### ●今後のDAA発展に期待すること

初代DAA運営委員長長の巖隆吉氏からは、DAA会員の増強、新機軸を加えた更なる発展、及びDAA会員主体に活動しているNPO法人「かながわ子ども教室」(注2)・ダイヤネット(注3)・ダイヤビックひばり会(注4)との連携強化など、期待が述べられました。

また、初代財団常務理事の若林健市氏からは、「DAA活動を通じたコミュニティーづくり・運営のノウハウなど苦労した問題や現在の活動状況などを、三菱グループのみならず社会一般にPRし、高齢者の社会参加活動モデルとして提供してほしい」との要望がありました。

(注2) 神奈川県在住のDAA会員有志によるNPO法人(2009年4月設立)。神奈川県内を中心に子どものための科学教室・暮らしの教室を開催しているが、社会的に高い評価を受けている。

(注3) パソコン通信をツールとした高齢者の任意団体。三菱企業退職高齢者が中心になり活動している。

(注4) ダイヤビックは高齢者向けに開発されたエアロビック。ひばり会は当財団が認定したダイヤビック・インストラクターの会で、首都圏を中心にダイヤビックの普及活動を行っている。



会員スピーチを行う三嶋清敬氏。



スポーツ吹き矢を実演する北原佳定氏。

## 会員スピーチ発表会

DAA 交流会第2部は、昨年同様、各地域活動グループ定例会における会員スピーチの中から選ばれた二つの会員スピーチの発表会として行われました。

今回の会員スピーチは、三嶋清敬氏（ダイヤ小田急線友会）が「世界遺産を歩く——古代ローマの地中海世界」、及び北原佳定氏（ダイヤ茨城）が「60歳からのチャレンジ」と題し、1人1時間それぞれパソコンを用いたスクリーン画面で発表しました。

前者では、三嶋氏が定年後に始めた「世界遺産を歩く」活動の中から古代ローマの地中海世界を取り上げ、氏が数年かけて訪問したイタリア・トルコ・シリア・リビアの古代ローマ遺跡巡りを通して、古代ローマが持つ文化や技術の高さが紹介されました。数多くの美しい映像と氏のゆったりとした語り口で、聴講の会員たちは、スケールの大きな時空の世界にしばし酔いしれていました。三嶋氏のスピーチは、建築専門家の目を通して見た古代ローマ文化・技術の高さへの驚きと感動の紹介でもありました。

後者では、早期退職後2年半介護してきた愛妻を看取ったのち呆然と過ごしていた北原氏が、60歳を迎えて「毎日がゼロスタート」を自認していたことを思い出し、これからの貴重な毎日を有意義に送るために何かやらねばと、一から「山登り」の基礎を学び、基礎体力増強のために「走り」を始め、国内外の数多くの山々やマラソン大会にチャレンジし、現在は「スポーツ吹き矢」にも取り組んでいる活動が紹介されました。また、北原氏本人による「スポーツ吹き矢」の実演もあり、5射全ての的中の妙技に会場から大きな喚声があがっていました。

両者のスピーチは、静と動の違いはあれスケールの大きな活動内容で、それぞれ楽しくチャレンジしながらシニアライフを送っている様子がうかがわれました。

また、二つの会員スピーチの間に、ダイヤビックひばり会のDAA会員インストラクターによるダイヤビック（P9注4）が行われ、会場の参加者たちはストレッチ体操や音楽に合わせたダイヤビックに軽い汗を流していました。

## DAA入会のメリットについて

2006年1月DAA会員を対象に行ったアンケート調査では、DAAに入会して良かった理由として挙げられた回答から、「DAAが、三菱グループという『ご縁』で結びついた緩やかな縦と横の関係の組織である点が、彼らに居心地の良さを感じさせ、また、異業種の様々な人との交流により学ぶことが多いというメリットを感じさせている」ことが分かりました。

このことは、今回のDAA交流会でも間近に見ることが出来ましたが、DAAが企業退職高齢者の居場所として「いきいき高齢者づくり」に寄与していることを意味しているものと思われます。

## 最後に

以上みてきたように、DAAは企業退職高齢者の居場所づくりや組織づくりの一つのモデルです。今後、このDAAというモデルが、高齢社会を巡る様々な状況の中で、何かしらの「ご縁」で結びついた「いきいき高齢者づくり」の参考になれば幸いです。

（三好和仁）